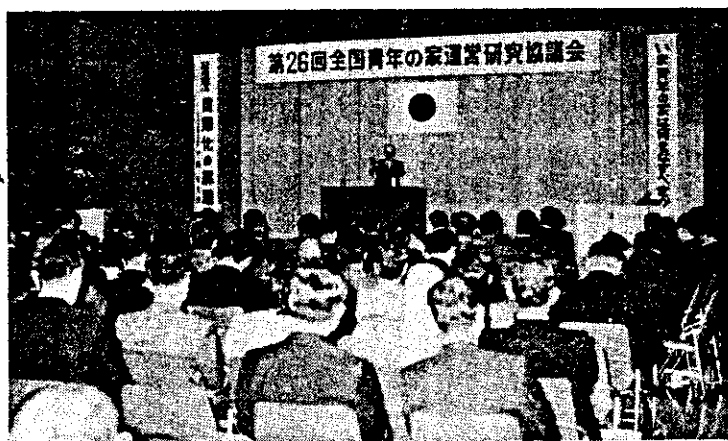


▶「つき合い方を青年の家で……」と、講演される木田先生。

## 記念講演



### 「国際化の課題」

講師 日本学術振興会理事長  
元文部事務次官 木田 宏

## 「相互依存」が国際秩序に

### 青年の家 共通点からの広がり

#### 行動能力が拡大

ご紹介いただきました木田でございます。

約1年前になりますが、淡路青年の家の前所長さんであった小島先生がやって来られ、11月に青年の家の大会があるので、是非来てくれというご依頼を受けました。ご紹介いただきましたように私は社会教育を担当しております、この淡路青年の家をここに決定し、それを強く受け継いで担当しておりました関係から、お受けした次第でございます。

社会教育を離れて16~17年経過しておりますが青年の家に対する興味は常に持っております。現在どのようになっているかは必ずしもよくわかってはおりませんが、通りに

青年の家を思いつくと「コンニチワ」と青年の家に話しかけるわけです。いかにせん多くの青年の家は風光明媚な地にあるのですから通りすがりではそう簡単に見つけることが出来ません。私にとって忘れられない青年の家がかなりあり、青年の家に対する興味は常に持って参りました。

そこで、「国際化の課題」と言われましても、「青年の国際化の課題」を端的に「青年の家」に結びつけて考えることは、これまた難しいことです。結局、自分で考えている一般的な話をさせていただこうと思いつつ出て来たわけでございます。

まず、「国際化」とは何か。少し固くなって恐縮ですが、「国際化」という言葉は中に入っているデモクラシー的なもの。「国際」とは何か。非

常にたくさんあります。「国際」という言葉は、国と国がつき合うというような関係が出てきます。今日、国際化として問題にしなければならないのは、単に「国と国とのつき合い」ということではなく、もう少し広いものとして考えております。

何故「国際化」ということが言われるようになったかといいますと、人間の行動能力が拡大したからであると私は思っています。国の行動能力はどうなっているかは後回しにして、一人ひとりの行動能力が拡大することによって……国際化したということによって……国際語の勉強がかなり必要になってきております。

今日ここへ来るのも、東京から2時間で来れるんです。徳島空港から1時間でここに来ているんです。時間的に大変助かるんです。現在ではいとも簡単に目的地に行くことが出来ます。それは何故かという、行動能力が大きくなったからです。昔、汽車で東京から鹿児島まで行く時間があれば、地球を一周することが出来るわけです。現に結婚式にしましても、披露宴の後の旅行先というのは、かなりの人たちが国境というものを感じないで国境を越えて行ってしまふわけですね。

私も研究会に出席するため、成田空港から飛行機に乗ることが多くなりましたが、サンダルをひっかけた姿で高い費用を使って外国へ出かけていく若者が多くなりましたね。われわれの時代では考えられないことで、ジーパンをはいて海外へ出かけていく、全く日常生活とかわらない感じで飛行機に乗ってしまうんですね。このように世界の大幅移動につながっているのです。

技術の発達によって人間の行動力が拡大しました。技術の発達というのは、人間性の抑圧につながると言いますが、そういう側面は「0」であるとは言いませんが、技術の発達によって人間の行動力が拡大しました。人間の本性が拡大したかどうかはわかりませんが、人間の行動力が拡大したことは間違いありません。モータリゼーションに

してもそうだと思います。そういう意味で、日本のような島国であっても国境というものを意識することが少くなりました。日本から海外へ出て行く人は、最近のデータによると673万人、たいへんな数ですね。10年前の10倍ぐらいに増えています。もっともそのうち日本人は460万人ぐらいでして、200万人の外人が出ていくというのはどうということかとすると、200万人の外人が日本にきているということです。日本人が460万人飛び出しているということは、460万近い人が帰って来ている。たいへんな数の人が海外へ行っております。

このように人の行動力の拡大によって、国境をあまり意識しないで行動できるようになりました。それでもまだ日本は島国ですから、ドイツなんかと比べると海外・国外への出入りというのは、まだまだ少ないわけです。西ドイツは、日本の人口の半分ですが、年間3,000万人以上の人が移動します。こういう時代ですから、少なくとも、ヨーロッパの人から見れば、隣りの国へ行くのは……壁の高い東側に、行くこと以外は……国内も国外もないんですね。今、避暑や遊びに国外へ行くのは普通のことなんです。これが、国際化のひとつのあらわれです。

## 物の流れにも 大変化が

物の方はどうか。物の方は早くから動いていましたから今にはじまったことではありません。しかし、「物の流れ」にも大きな変化をきたしています。最近の新聞で経済摩擦の記事の出ていないことがないということからもわかると思います。

歴史をふり返ってみますと、結局地球上の人間が争ったというのは、物を奪い合ったり、物を売り込んだりというのが歴史ですから、そういう点から言いますと非常に古い時代から物の流れというものがありました。今日日本でシルクロードがみ

なさんの関心を引いているのも、奈良時代にベルシャのガラスが日本に入って来ている、こういうことがあるからです。

しかし、この「物の流れ」が大きく世界的な流れになっておこってくるのが、15世紀であります。バスコ・ダ・ガマが喜望峰を回るとか、アメリカの発見があったのも、結局「物を手に入れる」ために新大陸の発見があったのですから、地球規模で物を見られるようになったのは5世紀ぐらい前だと考えていいわけです。

そのことを大変興味深く感じさせてくれる本に角山栄さんという方が書いた『茶の世界史』というのがあります。

お茶をめざしてイギリスがどのようにインドに進出したか、冒険をおかしたのは何故か。お茶を求めて、そのお茶にはじまるいろんな世界の動きがこの『茶の世界史』という本によく書かれております。そうした「物の流れ」が急速に進化したのは、第二次世界大戦後であります。

また、EC・ヨーロッパの連合国ですね。これも新しい動きです。イギリス・西ドイツ・フランス等々といった国があるわけですが、経済開発や原子力開発というのは連合国家といっしょに行動するわけです。国家を越えた国が、組織をもって日本との間に大使を交換しています。その東京にありますECの代表者がウイルキンソンさんで、『誤解』という本を書いております。今日の世界の流れが、「物の流れ」について、ヨーロッパの人も日本の人も誤解しているということを書いているわけですが、それを読んでおりますとなるほどだと思いますね。

第2次世界大戦までは、ヨーロッパの資本主義国がたくさん植民地から物を持って帰り、それを製品にしてアジアやアフリカや世界中に売りさばく、端的に言えば収奪する物の流れでありました。

ところが、第2次世界大戦がおこってからは、

この物の流れが逆になってきました。日本は世界中から物や資源を集めてきて、出来た製品はヨーロッパ・アメリカ・世界中に売りまくっています。攻め込んで収奪しているのは日本ではないか。このことについてヨーロッパはまだ自覚をしていないし、日本人はそういうことをやっていると思っておりません。アメリカからだって日本は、食糧や木材を買って自動車を送り込み、テープレコーダービデオレコーダーなど電気製品を送り込んでいるわけです。

ですから、第1次大戦と第2次大戦後では、物の流れがすっかり逆転してしまいました。日本だけでなく韓国もシンガポールもマレーシアも、新たに発展してきた中進国のグループまでが、アジアでどんだん力をもってきております。今まではアジアへ製品を送り込んでいたのだが、今はアジアの国々が世界各地へ製品を送り込んでおります。確かに日本の商品は世界中に行っていますね。「メイド・イン・ジャパン」というと、いやがられるほど「メイド・イン・ジャパン」が世界中いたるところにあふれています。……物だけじゃないんですがね。

## 他国なしで

### 成立しない生活

魚だってそうですね。日本は1年間に1,100万トンぐらいの魚を捕っています。地球上のあらゆるところに、日本の漁船が走り回って魚を捕っています。それでは困るといいます。日本に次いで漁船の走り回っているのが韓国です。そして日本は時々ソ連と争うことになります。日本の船が走り回っているのは困る。日本の商品が世界中に行きわたっているのは困る。そういうことからいろいろな問題が大きくなっています。

それほど物の動きというのは様相が変ってしまいました。日本の経済人に限らず1億の国民がどうやって生きていけるかと言いますと、——戦前

のような農村生活に逆もどりすることを覚悟する  
 というのであれば別ですが——今日のようなモータリゼーションの世界で、電気その他エレクトロニクスの技術を駆使した生活を維持していくためには、どうしても世界の各地から資源とエネルギーを持って来て、製品にしてそれを売り出して食べていくほかありません。

ですから、日本の将来を考えるという、もの理解をしている人は、国籍を持って海外に出ている30万人足らずの人で、その商社の人達あるいはメーカーの人達は、資源を買いつけて、そしてそれを売るという仕事を1億の国民のためにやってくれているわけです。今日ここにあるすべてのものは、日本の中で出来るものはありませんね。日本で作ってはいるけれども、その所在というものは電気からはじまって全部よそのものです。

そういう物の流れを見ていると、日本は他の国々との関係なしには今日の生活は成り立たないわけです。いかにけしからんと言われても、勝手な考え方ですが、押し通していくより仕方がないこういう状態にあるんですね。

30万人の人が海外で長期間生活しようと思えば子供さんも連れていかなければなりません。子供さんはそこで日本の教育を受ける必要があります。ニューヨーク市内に35,000人の日本人がおりますが、学校もそれだけ必要なんです。そうすると日本の先生もそこへ出かけていかなければならない。今1年間に1,000人の先生が、日本から派遣されています。世界中で70を越える学校がありますので、皆さんが海外へ行かれて、大抵の観光地——まあどうせ首都へ寄られるでしょうから——そこには日本人学校が必ずあります。大西洋の真中の島にも、南米やアマゾンの河口のベネズエラや赤道直下の所にもちゃんと日本人学校があります。ブラジルの山奥と思われるような場所にも日本人がいて日本人学校があって子供たちが通っています。そこへ先生が日本から出かけて行っている。こう

いう状態になっています。

そういう国際化の現状の中で、新しい国際秩序というものが広がりつつあります。それはどういう国際関係かと言いますと、相互依存の関係になりつつあります。先ほど資源のお話をしましたが、資源はみんなで共有しなければ人類が生きていけない。日本だけが勝手に石油を買って帰る、お金があるから買う、そして日本だけがうまいことをして、どうしてくれるんだというのが開発途上国の人達の言い分で、自分達にもその分け前を与えろということです。

## 薄くなってきた 公海の主張

今、地球資源で大きな問題が起きているのは、海の底の資源です。陸の資源はそれぞれの国のものです。資源を海の中に広めていきますと、「これは俺の河の鮭だから捕るな」と日本におこってくるわけです。政府もそういう言い方をするわけで、「もともと俺のものだ」という言い方が出て来るんですね。毎年腹が立つわけですが、動き回っている魚についても所有権を主張するというようなことが、だんだん出てきております。

それから、海の底200カイリまでは自分の国の経済水域だ、勝手に入ってきて魚を捕ったり石油を掘り上げたりすることはやめてくれ——公海という主張がだんだんなくなりつつあります。五大州の陸地よりも200カイリ広がった海の方が広く、日本も広げたいはずですが、200カイリ広げようとすると、お隣に韓国があり北朝鮮がある、またソ連があり中国があるわけで、広げようにも広げられない。そこで、一生懸命に接衝をしているわけで、200カイリと言われるとこちらも困ってしまう、そこはお互いに譲り合って魚を捕れるようにしようではないかと、相談しなければならないわけです。初めは3カイリが公の海、「何をやってもよろしい……」が、「それはちょっと困る……」

となって12カイリに、完全な主権が発動するところは12カイリ——今まで通っていた海峡が通れなくなる、そういうことになると、インドネシアの海の中は船が通れなくなるわけです。インドネシアは特に多くの島を持っているわけですからみんなが困ってしまいます。そこで一方では主権を広げながら、一方ではお互いの利益のためにみんなで使えるようにしましょう……と……となってくるわけです。

「みんなで使えるようにしましょう……」という大事な会議を長いこと続けて、ようやく2・3年前に結論に達したのが「海洋法」という条約です。これは海の利用の仕方、海中や海底にある資源の使い方を、国連に加盟している160か国近くの国々が共有の資源として考えようではないか、共有のものとして利用しようではないか……という方向に今動いているものです。

海洋法会議というのを10年ほど続けまして、一番最後までめめたのは、200カイリの外の海底にある資源、それは石油が出るかも知れません、鉱物資源が出るかも知れません、それは誰が持っているかという議論です。初めはアメリカも、みんなで使おうと言っていましたが、そのうち先進国で山分けしようという動きが出て来ました。そうすると、アフリカに50か国があるんですね。中南米に30か国ありますね。その国々が先進国が勝手に使うのはまかりならん、それは人類の共有の財産だからわれわれにも山分けしろとなったわけです。そこで最後になってアメリカのレーガン大統領が、そんなばかばかしいことはない、そんな海洋法はいやだと、アメリカはまだ批准をしておりません。日本は最初からいっしょになってやろうという姿勢を取っていた手前もあって、まアまア何とか海洋法を……とアメリカに声をかけております。それは太平洋も南氷洋もそうですが、公海の資源は共有のものだから採り出してきた時には、採り出してきた者だけが使うということのないようにしよう、という条約

に日本は承認・批准をしています。資源は共有であるという方向に、地球社会が動いているのであります。

しかし現実には、太平洋の何千メートルもある海底の資源を掘れるのはアメリカだけなんです。今海底の資源を一生懸命探し回っているのはアメリカに次いでフランスですね。日本はつい最近まで琵琶湖の湖底すら掘るのがしんどかった。琵琶湖は30～40メートルの浅さです。100メートル掘るということになると大騒動なんです。今日、海底油田の掘削能力を持っているのはアメリカだけで、それだけにアメリカは強い。アメリカの技術は6,000メートルの海底で1,000メートル掘ることができる。そこで各国は相乗りをさせてくれるように頼んでいるが、相乗りを頼めるのはヨーロッパの先進国と日本ぐらいのもの。それだけの国々でお金を集めて採り上げてしまったら、アフリカの国々はそっと見ていなければならない。そんなばかなことがあるものかと、多数にものをいわせてワァワァ言っているわけですね。

## 自然現象も

### 共有の方向に

このように地球社会は資源の共有という方向に進んでおりますし、自然現象すら共有していると考えられるようになりました。例えば、アメリカで火山が噴火すると、ソ連のパンの値段が上がったりするわけで、穀物の収穫ができなくなると他国にも影響を及ぼしてくる。こういう緊密な関係が資源共有のほかに社会システムとして考えなければならぬ。第2次大戦後このような方向に、動いてきたのであります。

今日、私達が考えているあらゆることが、世界の共同の作業として進んでおります。皆さんが朝晩見ているNHKのヒマワリの写真ですが、あのヒマワリは日本が打ち上げたものです。最近では日本でもロケットを打ち上げることができるよう

になっていますね。しかしあのロケットが日本だけで上がるというわけにはいかないんです。あのヒマワリを所定の位置にピシヤと止める、位置を確実にキープするためには、アルゼンチンとオーストラリアの監視ステーションでキャッチしてくれる。そのデータによって確実に飛行しているのです。このようによその国の協力によって、朝晩の気象通報が私達に届いているわけです。実は、ヒマワリの画像は日本だけが使っているのではなく、オーストラリアの気象庁も使っているんですね、私もすっかりしていたのですが、メルボルンにあるオーストラリアの気象庁に行きまして、屋上に案内してもらいました。私の背丈より少し大きいパラボラアンテナが据えてあるんです。「お陰さまで、ありがとうございます」と気象庁の人が、言ってくれる、何のことだろうと思っていると、衛星の画像が写っているんです。なるほど太平洋を中心にしてみんな写りますわね。日本だけが写っていると思っておりましたが、それは浅はかな知識で、丸い地球がハッキリ写っているんです。そこでオーストラリアもこれを使わせてもらおうということになりました。あのヒマワリの画像が日本の気象庁に送られて来て、そこで改像して写真にした画像をもう一度増幅してヒマワリに送ってやる、それをオーストラリアのメルボルンで見ている。オーストラリアの気象庁長官は、「お陰さまで、助かっています」と大変感謝しております。オーストラリアは日本の20倍もある国ですね。最中が砂漠で人間が住んでおりません。人間の住んでいるのは、東海岸・西の方・南のメルボルン・そのほかに少しづつ。ところが飛行機はオーストラリアの島々を南北縦横に飛んでいるわけで、飛行通報というのは貴重なんです。お陰で気象台を作らなくても、オーストラリアの航空便は全部ヒマワリの気象通報を利用させてもらっています」と感謝しています。

ですから、茶の間に入ってくるあの画像ひとつ

が国際的に共有されておりますし、今度また中国に持って行って使えるようにしようとしております。

衛星ひとつを取り上げても、お互いに生活するシステム、社会システムを共有していることになります。今、種痘がいらなくなりました。日本だけでなく地球上でいらなくなっています。それは世界のどの国も天然痘の撲滅対策をいっしょにとったからで、天然痘患者が地球上からいなくなったために、海外へ出る時に種痘をしなくていいし、小学校1年生で種痘をすることがなくなったんですね。

今日のあの円とドルの関係でもそうです。1ドルが200円を割るかどうか、これは大変なことですね。これもみんなの経済活動がうまくいくようにという経済システムが、地球全体をとり巻いているからです。

## 国内のことは国外のこと

## 国外のことは国内のこと

そこで、こういう社会システムというものを組織化していく組織が必要になってきます。国際機関・国際組織・国連もそうですが、いろんな組織があります。日本銀行に匹敵する世界銀行もあります。開発金融公庫に匹敵するような仕事をするがIMFで、金の流れを調節する組織等、日本の国内で各省庁がやっている組織が、全部国際的にできあがっています。国際機関というものはそういうものですね。その外に、地域ごとにOECDとかコメコンとか、中南米の通信機構とかアフリカの機構であるとか、たくさんの機構が作られています。近ごろはオベックが弱くなってきていますね。

民間の組織も国際的につながっております。ボーイスカウト、ガールスカウト、ライオンズクラブ、ロータリークラブ、全部国際的な組織になっています。青年の協議会も国際組織につながって

います。ユネスコの関係する教育・科学・文化・芸術関係だけでも相当数の組織があります。日本の中にある学会やグループもそのまま世界につながっています。

このように、あらゆる組織が国際的につながり相互依存の関係ができあがっています。近ごろは国の中の話だけで済まないことが多いですね。国内の問題がすぐ国際的になります。これは国内の政治問題であって内政干渉をするなど言いたいのですが、それが言えないことも多いわけです。日本の主権の問題であることにすら、さんざん文句を言われています。最後には日本語を使うのはけしからんと言いかねない状態です。靖国神社の問題、その前には教科書の問題がありました。これは国内の問題ですよ。しかし、外からいろいろと声があがってくる。それに対して日本政府は何も言えない。日本の国内で経済の成長率をどれくらいにするかということは、アジアの諸国はもちろん世界の先進国まで利害関係を及ぼすことになります。それほど国内のことは国外のことで、国外のことは国内のことなのです。

この間、イタリアの船がカイロで乗っ取られた事件がありました。そこでアメリカの軍用機がインターセプトしたら、イタリアの内閣が辞職しなければならなかった。これが今日の国際環境の入りくんだ姿であります。

今日の世界秩序はどのように動いているのか。第1次世界大戦・第2次世界大戦というピークをみて、どのように動いてきたか。これは後世の史家が、今日の日本の史家が考えていかねばならないことです。

## 大国でも

### 一人立ちできない時代に

まず、第1次世界大戦はどういうことで起きたのか。それは民族独立であり、民族自決でありました。サラエボでオーストリア帝国の皇太子がユー

## 木田 宏先生

### 略 歴



京都帝国大学法学部卒業

- 21年 8月 文部省入省 教科書局
- 29年 3月 社会教育局視聴覚教育課長
- 30年 9月 初中局地方課長
- 35年 1月 大臣官房総務課長
- 39年 7月 ユネスコ国内委員会次長
- 40年 7月 大学学術局審議官
- 41年 7月 社会教育局長
- 44年 1月 体育局長
- 46年 6月 大学学術局長
- 49年 6月 学術国際局長
- 51年 6月 文部事務次官
- 53年 7月 国立教育研究所長
- 60年 4月 日本学術振興会理事長

ゴの青年に狙われた。われわれだって虐げられた民族ではないと、バルカン半島の独立を叫んだのが第一次大戦であります。この大戦以前のバルカン半島の国々は、オーストリア帝国・ドイツ帝国の支配下であり、この支配に反旗を翻して民族独立を叫んだのが第一次大戦のはじまりであります。

第2次世界大戦は何で起きたのか。これはアジアの民族の独立を日本も考え、アジアの人が考えたからです。今日、どういう歴史の教え方になっているか、知りませんが、否定することのできない現実があります。アジアには、独立国がなかった。かろうじてタイと中国、それ以外は植民地であるという状態でありました。これではいかんということから大東亜戦争というひとつの目的を持って戦争を起こした。日本も勇み足があったことは事実です。満州に独立国を作ろうとした、それは帝国主義であったかも知れない、そういう見方ももちろんあると思います。しかし結果は、第2次大

戦までは世界の独立国は50カ国を教えるに過ぎなかったが、アジアの国々が虐げられているのではないという目的で起った争いの結果、アジアにたくさんの独立国ができました。インド・ビルマ、シンガポール、マレーシア、ベトナム、フィリピン、そして、現在太平洋の島の中に11の独立国があります。赤道から南にも独立国ができました。そして、それぞれがみんな主権のある国だと主張しております。

民族自決というのは、第1次・第2次大戦を通じて完全に花が咲きました。そしてみんながひとり立ちできない結果ができました。大国といえどもひとり立ちできないということは、民族自決ではなくて、相互依存・助け合いということがない限り160の国が生存していけないという市民社会になりました。国際関係はこのように動いているのです。

もちろん、今でも武力のある者が大きな顔をしています。東西対立の話をつけるために、ジュネーブでレーガンとゴルバチョフが話をすることもあります。しかし、その2カ国だけで総ての話がつくという時代ではなくなりつつあります。だからアメリカのごとくイギリスも間もなく「ユネスコはけしからん、いやだ、脱退だ」となるでしょう。国連は当初160カ国の国際秩序を想定していませんでした。第2次大戦後に50カ国で構成したのが国際連合であります。そこへわれもわれもと入ってきて160カ国になった時に、今の機構がはたしてベターなのかという、40年たったところで大問題にぶち当たっています。しびれを切らせて国際連合批判を始め、まず一番問題の少ない一逃げる側から言ったら——ユネスコはいやだというのが今起こりつつあります。アメリカがユネスコを脱退したのは、国際組織に対する大きな問題提起であります。今年の暮までにアメリカといっしょにイギリスが脱退するかどうか、これも大変な問題でありますけれども、今日の国際社会が

武力ではどうしようもないんだという状態になりつつあります。第1次・第2次大戦までは、武力のほかに工業力が加味されておりましたが、第2次大戦後は、資源が大きな力を持つようになり、工業国よりも資源国の方が強いという現象が起きております。

何故アメリカが強いか、と言いますと、食糧の生産ができるのはアメリカだけだという自負があるからです。本当はアメリカだけでなく、南米ブラジル、アルゼンチン、オーストラリア等たくさんあって、アメリカだけが「言うことをきかないとご飯を食わせせないぞ」と言えませんが、アメリカに意地を張られるとソ連でもその他の国でも、飯の食いあげになることがかなりあります。なんとかして世界の農業生産を高めていかないと、アメリカの力は大変大きなものになっていきます。力は武力だけではないわけです。

## 物と人と心が 結びあうこと

それに、今日最も大きな力を発揮しているのは情報であります。それは知識といえるかも知れません。第2次大戦後、知識のあるところがより大きな比重を持つようになっていきます。知識は、悪い意味での情報から良い意味での知識まであるわけですね。情報戦略、一生懸命スパイ合戦をやっていますね。情報戦略から最も高尚な科学技術の知識、バイオテクノロジーの開発・核エネルギーの利用、こういう知識を持っている者の方が強いわけです。その知識がどれだけ自分のものとして使えるかという国が主導権を持つ、このような状態になりつつあります。

新しい知識や技術を自分のものにする、それは必死なんですね。日本は気のいいところだから、全部コンピューターに回す、最新のものをみんなソ連が輸入しようという戦略の場になっています。そういう面で、情報戦略のすさまじい動きが日本



を取り巻いて飛び交うこんな状態になりつつあります。

日本でできた原子力発電所の廃棄物質を海底に捨てることができない。日本政府は、マリアナ群島のところへ持って行って捨てれば、人類のために一番良いだろうと考えていても、そうさせてくれないのが、太平洋の真中にある島の10万人足らずの小さい独立国です。そんな核廃棄物を庭先へ持ってきて捨てられては困ると言われると、どうしようもありません。

このように、日照権があるから家を建てるなどというのと同じようなことが、地球社会の中で起きております。大きな国だから、武力を持っているからということで、廃棄物を捨てることはできません。武力を持っている大きな国が武力だけで、金を持っている大きな国が金力だけで、相手の自主性を損うことができないという、国際秩序になりつつあります。

国際理解ということとは、実はこのような現象を理解してもらうことで、単に「誰と誰とが仲良くしましょう」ということではありません。この「物と人と、そこに伴う心」が、地球社会の将来において結び合うということにならなければならないと考えます。

## おそまつな

### 日本の国際理解

ところが、日本の国際理解に対する知識はお粗末で、中学校の教科書も高等学校の教科書も、大学でもそうですが、日本が資源を購入している国々のことについて教えてくれるところが少ないですね。まずオーストラリアのことを知りません。オーストラリアの輸出の4割は日本です。日本はオーストラリアにとって最大の取り引き先ですね。そして輸入の2割は日本なんです。これも最大の取り引き先ですね。オーストラリアにとって、日本という国は最大の大きさを持った国です。このような

ことに触れることがありません。

カナダもそうです。オーストラリアやカナダは大変な資源輸出国であり、まず日本はその国々からたくさん資源を買っています。そして、中近東から石油を買ってきて、それで世界中に売っているわけです。アメリカやヨーロッパの諸国は何かにつけてガヤガヤ言いますが、オーストラリアとカナダは「どうぞ、日本によろしく」ということですね。アメリカの南部もそうです。ここからは木材やいろんな農産物が日本に入ってきています。こういうことについて、日本の知識というものは本当に開放されておりません。

一番知らないのは、お隣の韓国のことです。韓国の人とつき合ってみると恐ろしくなってきましたね。こちらからは向こうが見えないガラスで覆われ、向こうは素通しのガラスで向き合って話をしてしています。これでは韓国に対応できません。このように理解してくるとズレがあることをまず考えなければならぬわけです。そして次は相手がどれだけよく見えるかということを考える、国際的に理解が進めば進むほど、実は誤解が広がるんです。何も知らなければスイスは良い国だ、静かできれいな土地だで済みますが、よく見ていけばいくほど、正しく見ているかどうかということが問題になってきます。

日本人の知っているアメリカは、本当のアメリカではないと、よく言われますが、今一番わからないのが中国です。中国について、日本は古来から、思い出があります。しかし、新聞を読んでいると、おかしなことがいっぱい起こってきます。日本人の思い違いも、たくさんありますね。一番ひどい思い違いは、文化大革命の時の日本の新聞記事、あれで理想の国であるかのような書き方をしました。

そうして今、まったく逆のことを言っています。そうかと思うと、また雲ゆきがおかしくなってくるんですね。ですから、中国という国には本当にむつかしいところがあるのですね。

日米安保条約、つい最近まで敵であるかのごとく言っていたかと思うと、安保条約はソ連の覇権抑制のためには非常によいと言っています。今度また軍国主義復活ということをはじめておりますが、このようなことは、もう少しクールな目で相手を見るようにしなければならぬと思います。自分の尺度でしか人を見ないということは、本当に困ったことです。

## 大事な 世界の物指し

日本人はお人好しだといえます。日本人というのは、平和憲法を持っていて、非核三原則、自由経済ですのでどうぞよろしく。これは自分だけがそういっているのであって、世の中に通用するわけがないじゃないかと、よその国の人は言います自分だけが平和で、商売だけはひとつ自由にやらせてもらいます。こういう虫のいい話は通用すると思っているのかと、どなりつけられているわけです。しかし、日本人というのは、そのところがわかってないから正直です。「いやー、平和国家になりました……」と言っているけれどもこのような自分たちだけの物指しでものを見ていて、世界の物指しでものを見るとどうなるかということの理解が全くありません。それは付き合っていないからで、遠いところのことだと思っている。そのために、日本をとりまく国際関係は大変むづかしくなっている、険しい状態になりつつあると思っています。こうした国際化への対応をどうしていったらよいか。私はまず、知的理解を持つ必要があると思います。歴史的な地理的な広い視点でものを考える、決して目の前の短期間のことだけ考えてはいけません。長い人間の営みの中で、世界人類の営みの中で、どういう意味を持っているか、将来どういう方向に向かっているかということを考えていかなければならぬと思います。

その意味で、日本の歴史の、あのような教え方

では困るんですね。皆さんの中には教職におられた方も多いでしょうが、日本史と世界史とを二分していく、東洋史を入れて三分していくというようなものを見方をしているのはだめですね。

それは、さすがは大英帝国だと思いますね。イギリスの慣行には、イギリス史・世界史という区分はありません。それは過去が、自分のことが全部世界だったということもあるでしょう。しかし地球全体を見渡して、今起きている問題と結びつけて考えていく、そんなことが大切ですね。

戦前の4ヵ年だけを取り上げて、日本の軍国主義が何だかんだと言っているような、そんな視覚では心もとない。もつと長い視点に立ってものごとを考えていく、そして相手の立場に立って考えていく。……相手だったら、どのようにこれが見えているか……向こうの立場で見る努力をしなければならない。こちらから見えて、相手からはどう見えるか、相手はどのように判断しているかということについての理解を深める努力を、しなければなりません。この世の中の知識の問題としなければなりません。これはなかなかむづかしいことです。みんな予測が違いますから。

イランの国王のところへ、日本は石油が大切ですから、お宅の石油をどうぞくださいと、福田総理が言った。その翌日からイランは、ばたばたとホメイニ師にとられてしまった。何という言い方をするんでしょうね。こちらから石油がほしいとそのことだけを考えていたんです。相手がどうこうだということのように思われることが一つもありません。

同じようなことが、アメリカについても中国に対してもありますね。日本人の相手に対する理解の度合いというものが極めて自己流で、相手の立場に立ってそこから世界を見るとどう見えるかという視点というものを確かめられない。日本人にはこういう弱さがあります。このことは、日本人には討論ができてないですね。相手が言ってきた

た時に、相手の理論の矛盾をつかまえて逆に攻めていくことしかできない。相手の立場を理解して相手の立場に立って、こう言うであろうから、そうしたらこう言おう、というような見通しが無い。これは国際理解ということをお口にしながら、また世界への知識を持っているはずなのに、その知識に片寄りがある。こういうことだと思います。

もう一つ大事なことは、いろんな人と付き合ってみることですね。国際化は、付き合っているだけでいいということではなく、1人ひとりの人間が、国境を越えていろんなところへ飛び歩いていく。そして人間として本当の付き合いをしていくことですね。日本人は国境を越えていろんな国へ行っています。それも農協さんという旗について行く。そして旗のあるところにくっついて、誰かが土産物屋へ入るとみんなが入っていく、誰かが買ったならみんなが買う。しかし付き合いはありません。

## 相手にされる

### 努力こそ

付き合いとはどういうことかということ、グループでは付き合いではありません。青年の家にはグループごとの付き合いがありますが、それはそれとして、付き合いとは1人ひとりが付き合うのであって、すべての代表がジャンケンをするようなものではありません。

日本人は1人と1人の付き合いが苦手です。付き合いは1人が大事なんですね。日本人にはあらたまて自己紹介をする人はいません。知った人だけが集ってしまう、取りつく鳥がありません。私はこういう者です……頼りになるかならないかで本当の付き合いがはじまるのです。日本人というのは付き合いでもおもしろくも何ともない人間ですね。それに比べると、ドイツ人は付き合いから大変おもしろい人間です。自分を抽象的に相手に印象づけるものだからおもしろい。こういう付

き合いが国際化につながるのです。日本人は持っているものが足りないのです。

私は青少年のことはよく知っています。イギリスのことについてはロンドンのどこそこをよく知っています——と言っても、相手はそのことを聞いて、付き合う術もないわけです。まず日本のことについて話をします。日本の宗教はどうだ、お花やお茶はどうだ、私はこんな生き方をしているがあなたはどうか、どんな生き方をしているのか。そういうことの話をしていく、それを聞いて相手がおもしろいなあと感じないと、付き合ってはくれません。

私はロンドンの何々の歴史をよく知っていますと、いくら知ったかぶりをして、イギリス人は付き合ってはくれません。そんなことで別に日本人と付き合わなくても、もつと付き合う人が多くいるからです。

アジアの国々へたくさんの人々が出かけいきます。アジアへ行って東大を卒業したことが信用につながるかということ、決してそうではありません。実際にみんなといっしょになってダムを作り、電線を引き、工場をつくる。「こうなんだよ」と手を取り足を取り教える。そういう人にこそ親近感を覚え、そういう人こそ信用されるわけです。実はそのことによって、自分は何であるのかという認識ができるわけです。大体日本人は、聞くのを自分の方から期待していますが、実はそうでなく相手にわかってもらえる努力が大切です。これからはそういう時代になっていくわけです。経済的に見ればよくわかりでしょう。自分の考えを相手に訴えていくことが大切です。そういう意味では、中曽根さんというのは国際社会にとっていいことを言っているという感じがしますね。日本はどう思っているか、世界はどう考えているのか……と、このように自分の考えを結果的に相手にわかってもらう努力。もっと言えば、歴史と売り込みの努力が必要となってきます。

ここへ来る前に鳴門教育大学に寄りました。この大学に国際科があるんです。日本の大学では、こんないいことをしているからといっても、学生はなかなか集ってきません。このような教育が必要ということをもつと宣伝すべきである。国際化ということは、「自分と付き合ったら、こういうことがありますよ」と説明できなければならないことであります。

大体われわれの中学時代は、よそのクラスの生徒とは付き合うな、上級生と付き合うな、上級生と付き合うと不良になる、下級生と付き合っているな、こういう考え方で固まっていました。こういうことではよそから見ると何だろうと思われますね。このような考えでは、付き合いというものは存在しませんね。表面的に付き合っているといっ

ても、結局は付き合っていないことになります。実際、国際化ということで、日本は世界とこのような付き合いをしていくのでは、日本の生きていく道は拓けていきません。

## 「コミュニケーション」 としての言葉を

付き合っていくためには努力が必要です。その中で言葉をどうするか、言葉が大事になってきますね。英語だけでまかり通ると思ったら大間違いです。英語を知っているということも大事ですがしかし韓国の人と付き合うと韓国の言葉がわかっていなくても、どうこうしているうちに使えるようになってきますね。まあ、仕方がないから国際

▶時には静かに語りかけるように……「国際化の課題」について講演される木田先生。



▼講師の一言一句を自分のもののように、熱心に聴き入る参加者。



的共通語の英語を使うこととなりますが、中国へ行ってしゃべるのに、中国語がわからなくてもいいです。

アジアの国々と広く付き合っていくため、単語を入れて、身振り手振りでやっていく、そのうちにインドネシア語、マレーシア語がわかってきます。私が兵隊の時にそのようにしてやってきました。鶏か卵かと言っているようでは、言葉の解決はできません。いくら言葉を覚えておいてもだめですね。実際に単語を並べてやれば、だんだん覚えていく。言葉とはそういうものです。

そういう意味で、日本における英語教育は、大体ものを言わせない教育になっています。いろいろと詰めていくと問題がありますね。日本の教育は聞いたり読んだりするための能力だけを考えていますが、コミュニケーションとしての言葉はどう使うか、その使わせ方が大切で、今の教育ではいくつになっても言葉として使うことはできません。

日本人は国際化になると、誰と話をするかわからない、確かに日本人の言葉は個性があります。そういう意味で言葉というのは不思議なものです。しかし態度ということ、これが教育では大事です。

## 付き合い方を 青年の家で

青年の家での付き合いをどう広げていくか。私は共通のところから広げていったらよいのではないかと考えています。そういう意味で横との付き合いをさせていくために、どこに共通の問題があるかをよく見定め、共通のことはみんなできいしょにやってみましょう——ということが大事だと思います。自分には自分のプログラムがあり、あなたにはあなたのプログラムがありますが、どこかで共通なもの一つある。そしたらいっしょにやりましょう。そういう努力が大事です。

明るい面を見ていこう・暗い面も見ていこう……そういうことも大切かも知れないが、いつも見て、引張っていく・広げていく、ここの良いところ、あそこの良いところを広げつないでいく、このような努力が必要です。

付き合いというのは、生きている一つの過程です。

国連大学に來ている外人さんのアパートを見つけるのが、大変むづかしいですね。お金を持って來てくれる。そのうちに來てくれる……間違いですね。そこまで付き合い合ってくれません。日本人は外国人が日本にいと外人と思っていないのです。そして、東南アジアの人は、外人としか考えていません。これは東南アジアの人の実感でもあります。へんな迎合をする。迎合するのもよくありません。きれいごとはよくありません。

しかし、何か宗教を通して付き合い合っていく、人と人との壁を壊していく、いろいろ整備しながら前進していく。それが社会教育です。ここをよくわかっているのが体育・スポーツをやっておられた方で、仲間以外の人と付き合い努力をする中で、人が言う前に、自分から行動を起こしますね。

私は、先生方の中で一番付き合いの場の広い人は体育の先生だと思っています。この方々は学校の先生以外に付き合いがあります。そこで体育出身の校長さんや管理職の方は、なかなか教育に幅がありますね。

さて、別の社会に目を向けてみましょう。そういう付き合いの出来る人はなかなか見つかりません。愛国心という問題ですが、特定の人としか付き合わない、これは困ります。本当の愛国心ではありません。こちらに言うこと・あちらに言うこと別々では困りますね。

また、最近困るのは、日本人だけにしか通用しない日本語でものを言うことです。もし日本人の使う言葉が英語であった場合、他の人を意識しな

いでうっかりしゃべるわけにはいきません。日本語というのはある意味では閉された言葉です。その閉された言葉を使って単語でものを言う、言葉について気を使わない、時代が、変りつつありますね。

日本人は「自分を中心に、自分のことをどうするか」ということが多いわけですが、これくらい非愛国的な言葉はありません。われわれの持っている価値感、世界観をできるだけ相手と同じペースで考えて見ていくようにしてほしい。共通していることはいっしょにやろう。出来ないことはお互いに統一一点に向けて話し合っていく、そうすることによって輪が広がっていくのです。片方が違うから駄目ということでは困る。まず基礎を固めていくことが大切です。何故結束しないか、本当に危機感があります。

## 知識の 習慣づけを

こういう行動様式、人との付き合い方をどこで身につけていくか、私は青年の家しかないと考えております。国際的な態度、価値感、外国の人と付き合う態度、隣の人と付き合い合っいっしょに手をつないで輪を広げていく努力を、青年の家の活動の中で是非やってほしいと思います。会社員と高校生が、またあらゆる世代間の暖かい交流ができるのが、~~最近では~~青年の家であります。

青年の家へ行くと、「ここの青年の家の方針は従ってプログラムは、活動は、」…と注文が多すぎます。実はそういうことではないんだという知恵を付けるのが青年の家であると考えています。たくさん人や団体が集って来て共同生活をしているから、このことは仕方ないんだ、いろんなことを勉強する中で最低これは守ってもらいます—も大事ですが、メンバーが何を感じて青年の家へ来ているのかの方が、もっと大事だと思います。青年の家ではどう教えていくか……というよりも

青年の家へ来る研修生の各人が持っている問題を少しでも同じ問題を持っている人と付き合わせていく。その共通問題はみんなが知らないわけですから、各人の情報を交換させていくことが大事です。お互いを理解するために、グループ活動をするために来ているのですから、その本質を見極めていかななくては青年の家の意味がないと思いますね。私がそう言いますと、青年の家はどうも使い過ぎだと言われました。その使い過ぎの原因はどこにあるのか、本当に使い過ぎかどうか見定めていかなければならないと思いますが、学級活動…それはグループ活動でないと考えております。

次に、青年の家は問題意識をどう教えるか、知識をどう習慣つけてやるかという目標です。習慣づけ—みんながそれぞれの問題を持ち寄って、その問題をみんないっしょに懇め合ったり、知恵を出し合ったりしていく。そういうグループの中から、ある習慣づけが出来てくるわけですね。こういう間接的な効果をねらってほしいと思っております。

そういう意味で、青年の家というのは、いろいろ違った人が違った問題を持って来て、持って来た問題をみんなのものにしていくことが大事で、いろんな人と付き合い、少くとも最少限誰と付き合い合っても「おまえと生活できる」ということを身につけていかなければならないところだと考えております。

通りすがりに、「俺と付き合い合え……」というような付き合い方では良くありません。付き合いは強制することではなく、同じようにすること。どういう人であっても別にかまわない。「いっしょに遊びませんか」という呼びかけの中で、同じようにしていく。これが国際化につながる近道であると考えております。

お約束の時間が過ぎたようですので、これで終了です。ご静聴ありがとうございました。